



### 三 面接 II

---

突然、頭の中に何かが流れ込んできた。理解不可能なものだ。美里がかつて見たことも、聞いたこともない何かだ。だから、何か、というしか表現ができない。その洪水のようなイメージは、美里の頭の中を駆け巡ると次第に滓のように沈静化していった。当初は、嵐の中にいるように目の前が全く見えなかったが、霧が晴れるように、次第に、何かが形を現し始めた。

そこには、巨大な山が聳え立っていた。山全体はほとんど雪で覆われていた。ところどころに、雪の白さとは不釣り合いの茶色い岩が見えている。その岩から雪で覆われているものの、この山が切り立った絶壁であることがわかる。いつこちらに雪崩が押し寄せ、落石が落ちてくるかわからないほどの威圧感だ。

「怖い」

美里の口から言葉がふと漏れた。

「恐くはないですよ。これは私の記憶です。あなたは傍観者として、そこで見ていればいいのです」

その山肌に何かが蠢いている。人だ。人が岩にへばりついている。いや、登っているのだ。それを見つめていると、自分が登っているわけではなく、ただ見つめているだけなのに、呼吸は周りの空気を振動させ、心臓の音は胸の皮膚を突き破って飛び出してきそうだ。

岩肌に取りついた蠢きは、順調に、手足を伸ばし、後、わずかで頂上に到達しようとしていた。その時だ。突然、登っていた蠢きが滑り落ちた。

「ああ」

美里の口から悲嘆の声が出た。自分の口から出た声なのに、自分の声でないように聞こえた。そう、誰かの叫び声のように聞こえる。そう、登山者の声だ。その声が美里に乗り移ったのだ。支配人と指を繋いだ瞬間から、声は自分のものではなくなったのだ。

美里は自分のものではないかもしれない目で登山者を凝視する。滑り落ちた登山者は空中に投げ出されたものの、バンジージャンプのように空中で上高下している。

よかった。ザイルで体が結ばれていたのだ。しかし、遥か彼方の地面には落ちなかったものの

、空中で浮遊したままだ。登山者と岩壁をつなぐのは一本のザイルだけだ。さっきまで蠢いていた場所に人影はない。彼？は一人で登っていたのだ。

彼は空中で浮遊を何回か繰り返した後、そのザイルを大きく揺らし始めた。振り子は次第に大きくなり、岩肌に近づいていく。彼はその動作を何回も繰り返し、ようやく岩壁に戻ることができた。そして、再び、登っていく。

その風景が突然消えた。

我に戻る美里。目の前には支配人が笑っていた。ただし、嘲笑するような笑いではない。どう、驚いただろう、という柔和な笑いだ。先ほどまで繋がれていた人さし指は既に離されていた。何か、夢を見ていたようだ。

「どうです。驚きましたか？」

美里の気持ちを読んだような問いかけだった。美里は大きく頷き、言葉ではなく体で表現した。本当に驚いた。目の前でテレビや映画の画面が映っているかのようにだった。その映像が、目を通じてではなく、直接、心に、脳に映ったのだった。

「あの岸壁を登っていたのは、あなたですか」

ようやく心が落ち着いた美里は支配人に尋ねた。

「いや。私ではありません。私は今のあなたと同じように登山者の彼と指を繋いでいただけです」

「つまり、支配人も私たちと同じようにハートケア士なんですね。それも熟練した。そして、その他人の記憶を、傷を自由に操ることができるんですね」

自由に操る、という言葉に強調した。初対面の相手に失礼かと思ったものの、その率直さが美里の売りだった。支配人は美里の言葉にも感情一つも変えなかった。

「人の感情は自由に操れませんよ。それが証拠に、あなたの今の発言を止めることができなかつたでしょう？私にできることは、人の心を、人の感情を受け止めて、共有し、共感するだけです。相手も共感されることを望んでいます。それで、この仕事が成り立っているのです。ただし、私は他の人よりも少しだけ受け入れ口が広く、記憶の置き場が広いだけかもしれませんがね」

そう言うと支配人はいたずらっ子のように笑った。支配人も感情を表に出すんだ。美里はその顔を見て少しは安心した。

「まだ、ハートケア士として十分な仕事をしていないのに、こんなことを言うのは、少し率直過ぎるかもしれませんが」

美里は自分からハートケア士になりたいと思い、勉強をしてきたが、以前から抱いていた疑問を支配人にぶつけることにした。それで、断られれば仕方がない。

「どうぞ。その率直さがあなたの売りなんでしょう」

支配人はもう美里の性格や気持ちを読み切っているようだ。それなら、余計に安心して発言できる。美里は続けた。

「先ほど、支配人は共有・共感という言葉を使いましたが、相手、お客さんは共感を求めているというよりは、一方的に、負の体験・経験を押し付けているだけではないのでしょうか？押し付けた側は、共有・共感してもらえたことで精神的な安定を得られるものの、押し付けられた側は、共有・共感されられたことで、精神的に不安定な状況となります。確かに、二人を足せば、ゼロサムかも知りません。

つまり、相手の不安や不快な気持ちが、お客さんのあちら側からあたしたちハートケア士のこちら側にただ単に移動するだけです。お客さんが不安や不快に感じた根本原因である問題や課題は何も解決していません。感情を先送り、いや、他人に送っただけではないのでしょうか」

やんわりとは言ったものの、ある程度の本質を言えたと美里は思った。

「もちろん、あなたのおっしゃる通りです。最初に不安を感じた人間は、例え、本質的な問題が解決しないとしても、一時的ですが、不安から逃れることができます。物事に問題が起きても、すぐには解決できる場合と、解決に時間がかかる場合があります。そうした悩みのある人たちの心の避難場所が、私たちの仕事ではないでしょうか。

お客様たちは、ハートケア士に心を吐露し、それを私たちが共感する。たった、それだけですが、その人にとっては、明日への活力になるのです。

もちろん、私たちはお客様の悩みを解決できません。お客様の悩みはお客様自身が解決するしかないのです。そして、その解決のために、ほんの少しのお手伝い、スパイスとなるのが、私たちの仕事なのです」

そのことは美里自身も考えていたことだ。このハートケア士になりたいと思ったのは、美里が離婚を経験したからだ。恋愛し、結婚して、子どもが生まれ、育てていく中で、二人の心が一つになっていくものと思っていたものの、それが、反対に心が二つに切り裂かれることになるとは考えてもいなかった。

「美里さん、あなたもその経験をしたからこそ、この仕事をしようと思ったのではないのでしょうか？」

支配人の指摘に美里の心が硬直した。支配人は人の心が読めるのか。先ほどまでの能弁さが消え、黙ったまま支配人の顔を見る。

「特段、私が、人の心を読むことができる超能力を持っているわけではありません。これまで、あなたのように面接を受けた人たちの言動から、今のあなたの気持ちを推測しているのです。

ハートケア士は、相手の話を聞いて、相手の心に寄り添い、共感して、癒す仕事です。しかし、人は相手に全ての気持ちを吐き出すことはできません。口にした途端、真逆のことを言うかもしれません。また、同じ言語や文化でないと、細かなニュアンスまでわかり合うことができません。

そこで開発したのはこの機械なのです。この機械をお互いの指に装着し、触れ合うだけ、人種や文化を越えて、心が通じ合う、心を共有することができるのです。

ある惑星の人々は体の一部が触れただけで、相手の気持ちがわかるとともに、自分の気持ちを伝えることができるのです。私たちは、同じ地球人同士で、例え、言語や文化、性別、年齢、趣味、生い立ちなどが異なっても、感情という表現を使って、意思を伝えることができないかと考えました。そこで、この惑星の人々と協力して、この機械を発明したのです」

支配人は右手の人差し指を見つめる。シルバーに光るその機械は、一見、単なる指サックのように見える。美里も自分の指に装着している指サックを見つめた。

「この機械があれば、言語が異なっても、翻訳の必要がなく、同じ地球人だけでなく、他の惑星の人々とも意思を、感情を共有できるのです。更に、私たちは使用方法を検討しました。意志の共有も重要ですが、それだけでは人は救えません。

悲しい気持ちや不幸な境遇を、言葉に置き換えることなく、ダイレクトに相手に伝えることができないか、そうすることで、本人は心の痛手を和らげることができるのではないかと。改良を

重ねて、ようやくできたのがこの機械なのです」

支配人は愛おしそうに右手の人さし指を左手全体で包む。指サックしか見えない、この変哲もない機械が何故、人の心まで伝えることができるのだろうか。確かに、指サックをつけたままでも、相手の体温、温もりは感じられる。

「そうですよ。体の温もりが伝導するように、心の感情、思考も伝わるのです」

支配人には機械を通じずにでも、美里の気持ちが伝わっていた。だが、素朴な疑問が湧いた。

「その機械の性能はわかりました。それなら、わざわざ、私たちハートケア士がその機械を付けなくても、普通の人々がそれを付ければ十分対応できるのではないのでしょうか？」

支配人はその質問も、その答えも想定していたようだ。

「確かに、おっしゃる通りです。ただし、人によっては、強烈な体験をしていて、そのマイナス感情が機械を通じて他人に怒涛のように流れ込んでいきます。何の対策もしていない、普通の人ならば受けとめられずに、心が破壊されてしまいます。そうならないために、一定の訓練を経た、ハートケア士の能力が必要なんです。いや、ハートケア士でないとできないんです」

支配人の顔が次第に柔和になっていく。話が終わりに向かって行く兆しだ。

「どうでしょう？ やっていただけるのでしょうか？ これは人助けであり、そして、自分を助けることになるのです。できますよね」

自分を助ける。美里は口には出さずに、口の中だけでその言葉を呟いた。そして、支配人を見つめ返す。お金が欲しかった。夫と離婚して、養育費は送ってもらっているものの、二人の子どもを育てていかなければならない。自分の親と同居しているが、親は既に仕事はやめ、年金生活だ。自分たちを支援する余裕はない。自分で自分の食い扶持を稼がなくていけない。そのためにこそ、ハートケア士の資格を取得したのだ。しかも、この仕事は普通のハートケア士よりも高給だ。やるしかない。できるかどうかよりも、やるしかないのだ。

「はい」

大きく頷く。決意は固まった。それは支配人に対してよりも、未来の自分に対してだった。自分を、家族を助けるために。